

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年2月1日発行  
(毎月1回1日発行)  
第16巻第2号 通巻176号

2 月号  
2021



山国の挽歌となれる里神楽

作務僧の一人が素足冬ざるる

檀林の寺の日向の冬紅葉

軒氷柱一滴がまた一滴が

漱ぐとき笹鳴のはたと熄む

参道の暇な理髪屋師走くる

徒らに句を呟いて枯野ゆく

栗鼠駆けよ一木一草枯るる中

鳩の笛みづうみにまた雨がくる

綿虫の蹤き来て逸れし石鼎忌

レノン忌を冬の渚に遊びけり

諸粥を煮てだんまりの宵がくる

十二月本所松坂町の雨

# 師走くる

主宰作品

増成栗人

# 詩 作品抄

宇治十帖のいよいよ佳境夜の長し 鈴木 崇

無花果の熟れ伊達領は風の国 石垣真理子

考へる葦かもしれず葦枯るる 山内宏子

むかご炊き結婚記念日恙なし 北城美佐

満月や前世は狼かもしれぬ 山岸明子

冬来るか十体並ぶ釈迦の弟子 竹山一子

柿を手に柿なき郷に生まれけり 和田 遊

源義の忌よ木洩れ日の図書館に 佐藤あさ子

一目ごと時を刻みて毛糸編む 青木まゆ美

船溜り水陽炎の冬の色 田邑利宏

啜へ木を湖に落として鳥渡る 山口優子

マスクして座席指定の村芝居 村手雅子

鴉の糞ひゆるると風の乾きたる 北村 操

いてふ散りまた散り閻魔堂の黙 林 未生

蛇穴に入る一切を忘るべく 守屋久江

日記にも小さき嘘あり星月夜 並河裕子

十七文字を楯に半生雪が降る 広瀬 弘

ばつたんこ水の重さの音となる 藤原明美

二人分の往復切符後の月 佐藤慧美子

家といふ家に柿の木子規の里 菊池ひろ子

増成栗人 選

# 『プロデュースの基本』

木崎賢治・著 インターナショナル新書・刊



た。七〇年代末、沢田研二さんがある不

祥事から復帰して間もなく、阿久悠さんに新曲の歌詞を頼んだときのこと。上がってきたのは「勝手にしやがれ」という曲だった。ある意味、大胆で不謹慎な提案に、さすがの木崎さんも怖気づいてしまったが、結果は大ヒット。セクシーでカッコいい沢田さんに足りなかった「情けなさ」を足すことで、逆に男らしいイメージが生

著者の木崎賢治さんは、僕にとつて音楽業界の大先輩である。プロデューサーとして沢田研二、山下久美子、大澤竜志幸、吉川晃司、横原敬之、ロックバンドではトライセラトップスやパンプ・オブ・チキンなどの制作を手掛け、これまで四十年以上にわたって数多くのヒットを飛ばしてきた。担当アーティストのライブでお会いすると、音楽制作に関する面白いエピソードを聞かせてくれる素敵な方で、そんな時いつも、業界の最前線で生まれた数々の逸話を僕だけが聞いているのもつたいないと思っていた。なので、今回、それが一冊になったことは嬉しい限り。早速、紹介したいと思う。

木崎さんの仕事は楽曲作りから始まる。ある歌手の新作を依頼されるとイメージに合った作曲家や作詞家、編曲家を選び、レコーディングをする。ここまでは、「ディレクター」としての仕事。木崎さんは作ったレコード(今ではCDや配信になっているが)を売るところまで責任を持つ。ここま

的な句作りというわけだ。

それにしても、木崎さんが俳句に言及するとは思わなかった。今度、会ったら俳句にどのような興味を抱いているのか聞いてみようと思う。そしてこの本を読んでいて、いちばんハツとしたのは次の言葉だった。

「歌詞とは、心という見えないものを可視化したものゝ俳句とも似ています」。

芭蕉の「古池や」の句にしても、ただ風景描写をしているだけでなく、そこに静けさや寂しさや人生のはかなさを表わしていると言語。「心を動かされたときに目に入ってくるものを描くことが基本じゃないかと思えます」。どうやら木崎さんの歌詞作りの極意と、俳句にはたぐさんの共通点がありそうだ。

「口笛や沈む木に蟬蚪のりておし」

田中裕明

口笛を吹きたくなるほど陽気な時に、作者の目に入ったのは群れ遊ぶオタマジャクシだった。春の胎動は小動物にも人間にも等しく訪れる。

「みえてゐて滝のきこえず秋の暮

万太郎

壮大な滝の前に立っているのに、鳴っているはずの水音が聴こえない。滝音は作者の心の中に吸い込まれ轟々と響いているのだった。秋の暮の凄絶な孤独を、無声映画のような滝の景色が見事に浮き彫りにする。これらの句は、正岡子規の唱えた「写生」から来ていると思われる。「嬉しい」とか「寂しい」とか言わずに、感情を目に入った具体的なモノに託している。

商業ベースで言葉をクリエイトする苦勞は推して知るべしだが、本書を読む限り、木崎さんはそれを楽しんでいゝ。「楽しんで作る」ことが、人の心を動かすのは俳句もポップスも同じだ。たとすれば、自分の句をプロデューサーする意識を持って、句作に挑んでみるのも面白い。そんなことを思いながら、横原さんの名曲「もう恋なんてしない」を聴いてみたらいかがだろうか。「ヤカン」や「紅茶」などのモノが、楽しく語りかけてくるはずだ。

「春風にこぼれて赤し歯磨粉 子規

「椿」はツバキ科の常緑高木。本州以南に自生するが、関東以北では海岸地帯に点在し、ヤブツバキともいう。葉は厚く楕円形で春、赤い花をつける。ワビスケなど多くの品種があり庭木としても重用されている。

果実は球形でその種子から椿油をとる。材は堅く緻密で農具や印材などに用いられている。「椿姫」はヴェルディのオペラ。難読漢字で「椿象」はかめむしである。

根来寺に実生の椿咲かせる 栗人

# 椿

## 特集

### 俳句に詠まれた椿

横尾かな

椿は梅と同じくらい春に先がけて咲く花です。ある歳時記では、「椿は国字で春の事触れの花の意」とありました。

春まだ浅き頃艶やかな緑の葉の間から一輪の赤い椿を見つけた折はほっと心が温まる思いがします。

椿は春の季語です。

季節ごとに咲く椿は冬椿、寒椿、夏椿と呼ばれています。椿の副題として山椿、乙女椿、白椿、紅椿、玉椿、つらつら椿、散り椿、落椿、敷椿、雪椿などが歳時記に挙げられています。

ここでは身近な「鴻」誌から椿の句を取り上げてみました。それぞれに椿の景が感動的に詠まれています。ご鑑賞ください。

弁天の寺のつらつら椿かな 増成栗人  
白つばき夢童女てふ慕誌ありぬ 石田蓉子  
また落ちてヒロインとなる白椿 岩佐 梢  
静かなる波郷の句碑に白椿 深川峰子  
林中の深閑とあり紅椿 坂入喜代枝  
赤椿傾きし日が山を這ふ 藤井のぶ子  
つらつら椿まつすぐに城の道 荒井一代  
花椿幹を濡らさぬほどの雨 北村 操

落椿また一つ風生れ来る 森多 歩  
利休の忌籬の上の落椿 小澤 冗  
敷椿山の鼓動のやうにかな 林 未生  
敷椿こぼれて種田山頭火 大屋敷悠  
崖椿沖より潮目濃くなりぬ 森 庸祐  
雪椿軒端に鮭を吊るしをり 佐久間敏高  
寒椿庭に静寂の戻りくる 荒川心星  
会釈して尼僧のよぎる寒椿 中村世都  
冬椿ことば少なに暮れにけり 山内宏子  
冬椿磯への坂の長きこと 森川淑子  
椿東風野地蔵の賽こぼれをり 飯島涼子  
椿東風庵主につづく和讃かな 西條弘子  
夏椿渡り廊下の反り加減 小原信子  
夏椿一輪高し雨人中 高木直哉  
いつも傍らに置く『吉田鴻司全句集』から椿の句を挙げてみました。 吉田鴻司  
島の童の袍かた手に敷椿  
たつねたる与謝の郡のつばきかな  
七畳小屋鶏の行き来の椿かな  
浦々の風にや椿の花あかり  
夜の色に潮目の変はる椿かな  
野や山や家の籬に咲く椿の凛とした風情は万葉の時代から現代の「鴻」衆にいたるまで身近な存在として親しまれてきたことが実感されたことでした。



## 寒椿喪の矢印が今日の道

堀部節子  
横井 遥

春は「椿」夏は「椿挿す」秋は「椿の実」冬は「寒椿」と一年を通して日本人には馴染みのある植物であり季語である。「椿挿す」を除いては例句も多彩である。椿は日本の特産品で、園芸品種は五、六百にのぼるといふ。

寒椿の咲く中、矢印が葬儀の場へと案内している。矢印をたよりに進むその道を作者は「今日の道」と詠う。この下五の表現に魅かれる。今日進むこの道は、自分で選んだ道ではなく、天へと召される人を送る為、悲しみに対峙する為の道である。人として死に至るまでの道程は、茨、険しい、乗り越える、決して楽に進める道ばかりではない。自分の希望通りの道を歩

椿

・特集

# 椿の一句

「椿」を詠んだ自分の俳句、または「椿」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「椿」について語っていただきました。

## 肥後椿雨夜を落ちて大きさま

中村汀女  
水沢和世

汀女郎には何度か伺っていて、見事な肥後椿の満開時お招き頂いた。先生が自ら説明された程、お気に入り椿であった。掲句は、大輪で美しい肥後椿を大事にされていたのに、昨夜の雨で落ちてしまった。「大きさま」の措辞に、落胆の程が推察される。それにしても、肥後の国に生れ育った汀女の容姿は、華やかさと、気品を兼ね備えており、正に肥後椿のような方だった。女学生時代、家路に着くと、袂はラフレターで一杯だったと、地元記者の談話で知る事となった。そして又、そのラフレターを入れたお一人に、細川隆元氏がいらした事も、私が「風化」に入門した時、先生は六十代でありながら、その気品に魅了された。もちろん俳句に感動した事は然る事ながら、報道等を知った華麗に感動して、入門した事は事実で、言ってみれば、みい・はあなのである。

## 引き際の美学椿は落ちにけり

谷本元李  
美濃律子

掲句は作者の第四句集『木椅子』に登場する。引き際の美学と聞くと、たゞうしても三島由紀夫のことが思い出される。椿は花よりも葉の美しさが名前の由来とされる説がある。真冬でも厚みのある艶やかで濃い緑の葉を付けていることから、不屈の生命力を示して縁起が良いとされる。また神聖で繁栄を象徴する木、魔除けの力を持つ木とされ、神社などでも多く目

める人、挫折する人、途中思わぬ方向へ行く人、それぞれの道を否応なしに歩むのである。今日の道を進む事で新しい道が開けて行く。「今日の道」と詠う事で、次の道へと進むうとする強い意志と力を感じさせる句である。

## 椿咲く深紅の闇を吐きながら

木暮陶句郎  
ありかわみのる

ツバキは春の花として、上代から知られ、『万葉集』にも詠まれている。更に、紫染に利用やツバキ油を採取など古くから行われ、鑑賞が始まったのは、江戸期と伝えられる。

陶句郎さんは創刊九周年を迎える「ひろそ火」主宰である。「俳句を愛し、自然を愛し、人を愛する。そこにこそ花鳥諷詠としての俳句の真髄がある。」と語る。

掲句は、句集『陶冶』（二春愁の鱸）から。

「深紅の闇」とは深紅に内蔵する暗流。この気運を進行形「吐きながら」咲く椿、大紅である。

作者は名の通り、俳人と同時に、陶芸家としても大活躍中。陶器逸品の誕生にも似ている。ここに「ひろそ火」の根幹を鑑賞。

この句に接し、生の哲学者ベルグソンの

「型にはまらないもの、それが人間性だ」  
が、ふと、脳裏をよぎる。

にする。

しかし、そういう椿が咲かせる花は、咲き満ちた後あつけない落ちてしまう。花の形を留めたまま樹下を彩る。椿の花に香りが無いのは、その濃い花色に鳥や虫が誘われるからとも言われている。美しい姿のまま落ち、落椿と詠われる様子は、それぞれ引き際の美学そのものであろうか。何とも羨ましい花である。「椿は落ちにけり」なのである。同句集より。

雪椿いちりんゆゑの色深し

谷本元子

## 母亡きに馴れてたつきの花椿

湯浅康右  
北村 操

湯浅康右氏は、藤田あけ鳥（草の花主宰）に師事され、俳誌編集に携わる一方、事務局長を歴任されました。師を看取られた後は同会を退会し、会社や大学の〇〇俳句クラブの指導を中心に活動されておられます。私とは地元の句会から一緒に「鴻」に入会しましたが体調を崩され止む無く退会されました。

掲句は『日々片』に続く句集『百小竹』より抄出した句です。

読み返すたびに「馴れて」に抒情の深さを感じるのです。刻を経ても母を傍らに感じるその子供としての心情は、変らないのです。母亡き日々は母在す日々でもあると悟り入れ、それを「たつき」の中で実感されているでしょう。開けっ広げの明るさではない「花椿」に託して詠まれているところにも思いの深さが感じられるのです。



## 「秋田・出張の旅①」

鈴木 崇

前職では東北へ出張に出ることが多かった。特に秋田県や山形県には何度も足を運んだ。秋田市には祖母の妹が住んでおり、子供の頃や二十代の頃にも旅行で訪れていて、馴染みのある地域だった。今回は秋田の思い出を書いてみる。

大叔母の家は秋田城跡の近くにあって、将軍野という地名である。城跡は、子供の頃には調査・整備中であつたが、二十代になって再訪した時には史跡公園になっていた。

旅の思い出を挙げると、子供心に竿燈まつりには感動した。五能線を一人旅して白神山地へ行ったのも印象に残っている。そういう思い出がある土地に、仕事で訪れるのは新鮮だった。駅前の飲み屋で同僚と愚痴をこぼし合ったりもした。取引先の方との食事で秋田の地元話を聞くのも面白かった。

出張では秋田市内のみならず由利本荘市やその他の市へも、一回の出張で南へ北へ

手元に写真集『木村伊兵衛昭和を写す4秋

田の民俗』（ちくま文庫）がある。戦後写真の第一人者が県内各地を撮影した一連の写真は代表作の一つだ。雪国、田植え、お盆、収穫、農村の四季をあますところなく捉えている。大曲の雄物川沿岸を撮った一枚の写真、近景には子供たちの後ろ姿がシルエットで写っている。その視線の先を渡し船が横切っていく。背後に白き山並み。写真を見る老は子供たちのまなざしに同化して遠景の渡し船を眺めることになる。なぜか懐かしい、原風景と言いたくなる光景。木村伊兵衛が撮った「記録」が「記憶」を刺激するのだ。

大仙市に出張した時には、昼十二時の時報で「ドンパン節」のメロディが流れて驚いた。ドンパンパソパンドンパンパン、大仙市中仙は民謡・ドンパン節の発祥地なのだ。のどかと言ってもいい町に突如鳴り響き、びっくりしたものである。

大館市には駅前に昔ながらの映画館があ

る。一度閉館して手つかずのままだった跡地を「住居」として借りたオーナーがDIYで改修し復活させたアットホームな映画館「御成座」。出張の最終日に電車が来るまで時間が空いたので、館内を見学させてもらった。

ロビーにはボスターや映写機などが所狭しと並んでいる。廊下には掛け終わった映画の看板絵が置かれている。映画館という場所の魅力が詰まっている空間だ。私が中学生くらいの頃まで、現在のようなシネコンはまだ少なく、映画館と言えばこんな感じだった。

やって来た電車に乗り、上映時間と同じくらいの長さをかけて東京へと戻ったのであった。

と、ここまで書いて俳句に触れられなかったことに気付いた。そんな回があつてもいいでしょう。

大館・御成座



俳誌のサロン



## 羽音集

増成栗人 選



札幌 北城美佐

船橋 藤原明美

さいたま 佐藤慧美子

流山 中内敏夫

俳誌のサロン

むかご炊き結婚記念日恙なし  
ラジオから真珠の声の星月夜  
ふぐ鍋にさつと取り出す懐紙かな  
冬山やドラマチックな鐘の音  
まんまるな鳩の屯す冬木道  
ばつたんこ水の重さの音となる  
木守柿一番星のほんのりと  
日の短七味を効かすつみれ汁  
迷ふことなしいちめんの枯尾花  
神の留守鍵穴に指当ててみる  
二人分の往復切符後の月  
鯛雲キリン三頭食事中  
秋日和河馬の鼻息荒々し  
落花生宇宙飛行士募集中  
蚯蚓鳴くひとつふたつの隠し事  
遮断機のリズムに銀杏落葉舞ふ  
踏みしめる枯葉の醸す温みかな  
一万歩超えて枯葉の溜まる道  
讃ふも妻に随ふおでん種  
がさがりと足元の朴落葉

# 楽庵閑話 32

虫丸



省略が効いた句を作る  
テクニクや早道なんて  
あるのでしょうか

省略を  
心掛けると  
いうが  
省略は  
結果であつて  
そのものが  
本来の目的  
ではない



省略の効いた  
俳句というのは  
詠もうとする内容を  
絞り込み

それが  
もっとも  
伝わり  
やすい表現を  
俳句の形式に  
添わせた結果  
そつなつた  
といつたもの  
なんだよ



いわば最短距離の  
表現への  
心構えが  
省略の  
テクニク  
といえるだろう

バッティングでも  
最短距離でバットを  
振れつて言うだろう

なる  
ほど  
!?!



相手チームは  
そつしてる  
みたいですよ!

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>